

細井広沢の竹枝

宮崎, 修多
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10457>

出版情報 : 文献探究. 17, pp. 52-55, 1986-03-20. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

に拠る。

(6) 同右。

(7) 建設社版『ジイド全集』第四巻所収 山内義雄訳「履金つくり」

(8) 岩波文庫「履金つくり」下巻(昭38・4)

(一九八六年八月稿)

〔付記〕

作品の引用は筑摩書房版全集に拠った。その際旧字体は新字体に改めた。尚、引用文中の傍点はすべて原文の儘である。

——九州大学大学院博士課程——

前号神訂、地獄極楽竹枝、及び竹内雲濤の
詩話のことなど
宮崎修多

前号で紹介した細井広沢の「武江竹枝歌」の翻字は、稿者の粗忽により一ニの間違いがあつたので、あわてて是正しておく。本文、陽田川とクマ田川と書いたのは曼敬と御勘弁願うことにして、翻字の竹枝詞、「其一」オ一句「八州流水落長江」は「八州流水落長河」が正しい。写真と出しておいたのは、これは数名の方々から御指摘頂いた。竹枝詞、「其六」オ二句は「亦、なるみやや万字ま書いていふが、何のことはない」「絲」字で、「今日銀絲膽可鮮」となる。銀糸鱈はほそまかなす。しほしほは白魚の事だ。まかしてあるとすべまか。「其二」の欠字はしつおいた二字は、今以てよく分かるまい。また、漢防印に印文を書かす所が、こ木が「ニ老略伝」に「広沢の池邊城の千代の古道」といふ所先祖の領地にて石名余もありしとかや故に広沢と号す千代古道と云印章もあり」(我月刊我本による)という印である。朱文長方形で「千代古道」となり、歌枕を刻する所に、また広沢の和漢一轍の指句を伝える。従来、彼の印を幾つか集めたもの等に余り見あたらずお様がお頼み水も、掌録。文化十年条に「広沢 細井次郎又 邊城ノ人ナリ。千代古道ノ印アリ。名所ナリ。三術町間ニ達シタリ」(随筆百花苑による)と書き留めており、「邊城ノ人」と設つていたもの、この印は結構知られていたのかも知れない。

前号、竹枝詞の語とした序では、もう一つ小文字を言及して置く。国史館書館野矢庫にある竹内雲濤の「蕉竹居詩話」第三編(写本、上中二冊存、自筆か)に「櫻神八景の詩」なる項があり、

清の沈起鳳著の「諧録」中の、華佩孌なる女儒者が十六才で文折した時
青虫が碧梧桐の葉を啗んで書いたという「冥中八景詩」の詠を紹介
してゐるが、それに加えて「曾て皇嚴梁先生の説くを聞く、中島増
太なる者、少年にして詩才極溢、曾て戯れに地獄竹枝、極楽竹枝共
に数首有りと、然れども其詩終に伝はらず、又惜むべまなり」と記
す。中島増太に於いては知る所がないが、最早一部の竹枝は、日本
的景情と通じ越して、完全な想像の産物ともなつていたのである。
田園詩や地名色のある竹枝詞の盛行の陰で、地獄極楽の竹枝など
いうものが詠まはれてゐた事は、たとえそれが青年客気のもたらす所
であつたにせよ、當代竹枝の爛熟極まり、の感を強くすると共に
更に多様な竹枝が、この暮末頃には、存しては消えていつた事を
想像させる。ともかくも、江戸期に於ける竹枝のはいめと結局、細
井広沢と中島増太の事を示してはなしと終わる。

○

この『蕉竹居詩話』は、富士川英郎氏によつて、柏不如亭の系列
に連なつたカカニ詩人と目された、醉死道人竹内雲清の、恐らくは
自筆の稿本であるが、それは完全に版本の体裁を覆した物で、題簽
見返し、目錄、本文の句点傍線等が整然と施されてゐる。見返しの
上欄外、普通の刊本なる「文化〇年新編」とか「天保〇〇の年間板
」とと横書きされた箇所は、丁寧に「文久辛酉起稿」と書かた。「
雲清醉史著／蕉竹居詩話（この行録書）／第二編全三冊」と感々し
く罪を引いて認められてゐる。版本を真似たかういう手の達人を写
本の例は他にもあるが、しかし、小野湖山に「猶や意に當らずは
則ち狂吟狂寫、其の座の人を凌駕す」（湖山稗詩扇風）と描かれた
酒亂の詩人の放恣な赤ら顔が、この写本からは浮かんでこないので
ある。先に挙げた地獄極楽詩の語も、話柄の奇怪なわりに以外と醇
々手とした教訓で結ばれた。いわく「世の詩に狂事する少年輩、只

己れが作るのミ能と為すべからず、更に古人の所謂多読多作多改に
非ずんば此道を以て赤幟を一方にたつる能はざるなり。歴代の正史
ハ勿論、晩近の稗史野乘、小説院本、いかなる零碎冊子といへ共、
得るにしたらび看るに随つて一読して益無しとなすべからず。取捨ハ
己れが心により、瓦礫中には珠玉なしと為す可からず。世の道字者流
一味聖賢賢儒にのみか、つらいつらいつて終年凡九、ついに一事を爲し得ざ
る者ハ、余が党に於て取らざる所なり」。もつとも一方で隨園詩話
の「果太守が醉余に隨園の庭中に立小便とした話を引き、「こ
れ又最可憎の事にして權勢を恃む俗官、往々此弊あり、豈た小彼那
のミだらんや、此等の徒、宜しく長剪刀を以て、那の道字を截断可
べし」等と氣文をあげる事も忘れぬ。反巻は、彼士本邦の文獻に
見えず蟹とほまぐりの例と博搜羅列し、所々自評をこぼす。蛤
蟹蛤蟹の糸で、かゝる癖をのぞかせた所は、確かに、詩本尊の
の作者の末流として位置づけられようである。他に、彼自身によ
る様々な型態の戯詩を間陳してみせたり、時に憤り、時に怒々と蒙
さしつゝ、その多様かつ自在な事、それはそのまゝ、彼の振幅の激し
い性格と学識の反映とみえた。この詩話起筆の翌年、四十八才の文
久二年十一月に、竹内雲清は江戸不忍池のほとりて病死する。恐ら
く第三編までは筆が及ばずあつたであらう。但しこの第二編の下冊
と第一編が存した筈で、御存知の方がおぼし是非御教示願ひ度と思
う。カカニ詩人の裏面には、過剰なまでの潔癖と自恃があること
常であるが、それと、この詩話の豊富な引用書に窺へる学植の深み
と、こゝろをなす体裁への配慮が少なくなつて知れてゐるのではあ
らう。雲清のやうに、一面を垣間見た善心にあえて紙面を割いた。

多罪。